

日明丸アンダマン海に没す

太宰府市 萩尾 浩

昭和18年1月15日。それは地獄さながらの恐怖の日であった。私は生涯、この日を忘れることはできない。

日明丸と門司丸という2隻の貨物船で編成された輸送船団は、シンガポールを出航し、ビルマ（現在のミャンマー）へ向かっていた。この船団は日本軍の捕虜となった外人兵士たちの護送が目的で、我々日本人は便乗のかたちであった。私の乗船した日明丸の輸送人員はオランダ兵1200人と、日本人230人であった。

鉄ばしごを伝って船倉内に降りたところに「かいこ棚」と称する低い床が何段にも造っており、我々はその一角に詰め込まれた。すぐ隣はオランダ兵たちの区画だった。彼らと話をすることは禁じられていたが、私はときどき、英語のできる若い兵士と短い会話をした。

彼は私にオランダ語の子守歌を教えてくれた。そして「戦争はお互いに不幸なことです。私たちは個人的には友達でありたいと願っています」と言った。

船は順調に航海を続け、すでにインド洋の東、アンダマン海を航行中であった。その日、私は蒸し暑い船倉を抜け出して、後部甲板で海風に吹かれながら日記を書いていた。海は穏やかで太陽は輝き、時折、何百匹ものとび魚の大群が、海面すれすれをグライダーのように飛んだりして、我々を楽しませてくれた。

皆は何の疑いもなく、この船団は戦争という厳しい現実から遠く離れた平穏な海上を走っているものと思い込んでいた。ましてや、インドの基地が発した敵の爆撃機が、すでに、すぐそこまで近づいてきていて、我々が壊滅的な破局を迎える事になった、あの恐怖の瞬間が、もう眼前に迫っていることなど、誰一人気付く者はいなかった。

耳慣れない爆音で、ふと見上げた私の眼に映じたのは、頭の上まで接近してきている巨大な重爆撃機であった。

「あっ、敵機だ、空襲、空襲」私は思わず大声で叫んだ。その声の終わらぬうちに、大きな機体から十数個の爆弾がパラパラと投下された。私はとっさに甲板へ身を伏せたが、顔だけは上を向いて爆弾の落下を目で追った。

爆弾は船から50mほど離れた海上に落下した。その爆弾が、海面に触れた瞬間、物すごい爆発音とともに6、70mもの大水柱を海上に立ち上がらせた。ちょうど仕掛け花火のように、十数本の水柱が正確な間隔を保ちながら船と平行して、すごい速さで左から右へと次々に立ち上がった。

一直線に並んだその水柱は、大きなポプラ並木のようにもあり、また魔法の壁のようにもあり、太陽に真っ白く光り輝く水の大カーテンのようにもあった。

これほど美しく、これほど雄大な、そして恐怖に満ちたショーを間近に見たことはない。私

は息をのんでこれを見つめた。水の巨大な柱は、ほんのしばらくその形をとどめた後、左の方からすごいしぶきとともに崩れ去っていった。

敵機はまた、すぐ引き返してくるはずである。ここは危ない。私は夢中で立ち上がると、船倉へ向け駆け出していた。船倉へ戻った私は、状況が分からず、不安な顔をしている皆の前で怒鳴った。

「空襲だ。演習じゃない、本物だぞ」

その声を合図のように再び爆音が近づいた。

「来たぞっ。伏せろ」

私は荷物の陰に身を伏せた。同時に爆弾の落下音が頭上に覆いかぶさった。

自分の頭の上に落ちてくる爆弾の落下音がこれほどすごいとは想像もしなかった。まるで雷が数十個も一気に落ちたような大音響である。単なる落下音ですらそれほどであるから、その爆発音のすごさは表現の方法を知らない。そのままでは耳の鼓膜が破れ、眼球が飛び出すとのことである。

私はかねてから教わった通り、両手の親指を耳の上に、残りの4本の指は眼に当て、しっかりと押さえ、顔を床に押しつけながら、「もう最期だ」と観念した。

爆発の大音響は全身を強烈な力で激しくたたきつけた。さく裂の赤白い閃光が、眼を押さえた手の指と、閉じたまぶたの肉を貫通して、パッと網膜に映じ、鼻にはツーンと火薬のにおいが飛び込んできた。

さらに、飛行機からあらしのように発射される機関砲の炸裂音が耳をつんざくばかりに加わった。巨大な船体は断末魔の苦しみさながらに激しく上下に揺れた。たった1個灯っていた電灯も、まるで息を引き取るようにフッと消え、暗闇がさらに我々の恐怖心を募らせるのだった。

すぐ目の前にいた同僚が「やられた」と叫んで倒れた。見ると、爆弾の大きな破片が彼のわき腹を貫通していた。私は介抱のため彼の身体を左手で抱え、右手で傷口を押さえようとした。しかしその手は、何の抵抗もなくポックリと腹の中まで入り込んでしまった。もはや絶望であった。

ここを逃げ出さねばならない。皆はその機会を狙っていたが、敵機が過ぎ去った一瞬「それっ今だ」と争って脱出して行った。

私は最後の脱出者だった。船の上にはい上がって、真っ先に眼に入ったのは、広い甲板いっぱいには散乱しているおびただしい死体であった。さらに、真っ赤な血は一面に流れ、折れ砕けた無数の骨や肉片が辺り一面に散乱し、まるで地獄さながらの惨状となっていた。

しかし、この恐ろしい光景を見ても、私は何の動揺も感じなかった。それは私自身がたった今まで、心臓がつぶれるほどの死の恐怖の中にいたからである。「おれもあんなになって船の底に転がっていたかもしれんなあ」と、ちらりと思っただけであった。

戦争は人間の心を無力にし、感情を奪い、狂わせる。それが恐ろしい。船を捨て海へ逃れた私は、近くにあった材木につかまった。緩やかな海流が、少しずつ私を船から遠ざけてくれた。

ふと振り返って見ると、日明丸が沈没し始めるところだった。船は急に棒立ちになり、一気に海底へ沈んでいった。しばらくは大きな水しぶきが吹き上がったが、やがてそれも消えた。後にはゆっくりとした波のうねりが見えるだけであった。

私は数時間後に、大破はしたが撃沈を免れた僚船の門司丸に救助された。死亡者は日本人30人、オランダ人600人と報道された。実に半数の人が死んでしまったのである。

あれから50余年が過ぎた。

消え去ってしまった人々の魂は、年も取らないまま、今も暗く冷たい海の底に眠っているのだろうか。

アンダマン海は、戦争の悲惨さ、残酷さ、そして人間の怒り、悲しみ、その他、もろもろの出来事を、何事もなかったかのようにのみ込んだまま、今も穏やかな波のうねりを繰り返していることだろう。